

「全人類皆殺し大作戦-後編-」

—初稿—

2025/6/8

脚本 太郎

〈人物表〉

春野 紡	(15)
霧崎 宴	(15)
霧崎 詩	(40)
霧崎 祭	(16)
高城 充	(45)

中学三年生
中学三年生。殺人犯
霧崎家の母
霧崎の兄
霧崎母の内縁の夫

整然とした、物が少ない部屋。

春野紡（15）、椅子に座っている。霧崎宴（15）、足を組んでベッドに座っている。

春野 「ぼくは君よりは自分客観視できてるし、全人類皆殺しなんて馬鹿なこと考えない」

霧崎 「言ってくれるじゃん」

春野 「ぼくは自分なりの、無理のない留飲の下げ方を知ってるから」

霧崎、鼻で笑う。

霧崎 「へえ。どう下げるのかな？ やられっぱなしなんじゃないの？」

春野 「常に自分より下の、より正しくない者が存在することを意識してる」

僅かに躊躇した後、

春野 「例えば学校では、ぼくは底辺かもしれないが最底辺じゃない。最底辺は君だ」

霧崎 「は？」

霧崎、無表情。

春野 「事実だ。さつきぼくら二人を『まともじゃない』と括ったが、その中でも優劣はある。ぼくは君ほど酷いじめを受けてない」

霧崎、強く春野を睨みつける。

春野 「ライターで皮膚を焼かれることも全裸で廊下を這いずり回らせられることも動物の糞を食べさせられることもない」

霧崎、強く拳を握り締める。

春野 「そう思えばこそ、荷物を泥水にぶちまけられても、申し訳なきような態度を維持しつつ自分を保っていられる」

霧崎 「何それ。自分より下がいるから虐められても平気だっていうの？ わたしのこと考えて内心で嘲笑ってスッキリってか？」

春野 「勿論それだけじゃない。今のは一例だ。そうだね、街では野良猫を片っ端から罠り殺してみたり、家ではむかつ

く妹や飼ってる犬を殴ったり、小動物とか投げて近所のガキの遊びの邪魔をしたりと、自分で手を下すことも――」

霧崎、春野を軽蔑の目で見ている。

春野 「そんな目で見られる謂れはないぞ。バレない範囲で、こういう細かい憎悪のやりくりをしているから――」

霧崎の表情が呆れに変わっていく。

春野 「君のように自分を過信することなく、自分より正しい人たちに刃向かわず、殺人なんて大きなりスクを冒すこともなくいられるんだ」

霧崎 「あつそ。それで結局何が言いたいわけ？」

春野、満面の嘲笑顔。

春野 「つまりぼくは、少なくとも君よりはずっとマシな、相対的に正しい人間だということだ」

霧崎、悲しそうな顔になる。

霧崎 「それって……下らないよ、物凄く」

霧崎の溜め息。

霧崎 「長々話したけど、無駄だったかな。君も含めて、やっぱり世界の方が正しくないのかも。わたしとは合わない」

春野、惘然となり、

春野 「何だと？」

霧崎、満面の嘲笑顔。

霧崎 「やーい、自分より下の存在にしか強気に出れない、被害者にも加害者にもなりきれない腰抜け」

春野、驚きと怒りを露わにして立ち上がると、一歩詰め寄って、

春野 「黙れ。君は違うとでも言うのか？」

霧崎、表情を微笑に変え、毅然と頷く。

春野、少し気圧されながらも言い返す。

春野 「いいや、君だって腰抜けだ。分かってるんだぞ。本当は君に自分より強い奴を殺す度胸なんてないって。さっきあの女を殺したのだって……」

春野、しばし視線を泳がせて、やがて思い至ったと
いうように、

春野 「そうだ。さつきあの女を殺したのだから、大方揉み合った末の愚鈍な過失致死でしかないんだろ」

しかし霧崎、キツパリと、

霧崎 「ううん、そんなことない。わたしちゃんと殺したよ」

春野、舌打ち。

不意に飛び付いて、霧崎の右手を押しさえつけ、ポケットに手を入れる。

ナイフを奪う。得意気な笑み。

春野 「はは、何てことない。これさえなければ、君なんてただの——」

霧崎、春野の足を引っ掛ける。

後方に倒れる春野。息が詰まる。

霧崎、その上に馬乗りになる。

その手にはいつの間にかナイフが握られている。

勢い良く春野に振り降ろす。

春野、無様な悲鳴を上げ、目を瞑る。

恐る恐る目を開けると、ナイフが眼球の寸前で止まっている。

霧崎 「わたし、何人でも殺せるよ」

霧崎、立ち上がる。一切揺らぐことのない瞳と態度。

春野、恐怖で言葉に詰まる。

やがて悩まし気に言葉を絞り出す。

春野 「じ、じゃあ……それならどうして今まで、今までは、黙って虐められてたんだよ？ どうして今日突然、あんなことしたんだよ？」

霧崎、腹部に手を当てる。

霧崎 「今までは、溜まるのを待ってたんだと思う。でももう、充分溜まったから」

霧崎、ナイフの刃に見入る。

霧崎 「とうか、一人くらい殺しておかないとはち切れそうなくらい溜まっちゃったから、やったんだ。わたしがバラバラになっちゃう前に」

啜う。

春野の顔に恐怖が浮かび、這って少し後退する。

霧崎 「本当は今も、お腹がはち切れそうで苦しいくらいなんだ。早く誰か殺さないとどうにかなりそう」

春野が短い悲鳴を上げ、壁にぶつかるまで後退。

春野 「く、来るなよ」

霧崎 「動いてないじゃん。そんな怖がらなくて大丈夫だよ。君とは共犯の約束したじゃない」

霧崎、ゆっくり振り返り、ドアへ向かう。

春野 「どこ行くんだよう？」

霧崎、ドアを開けた状態で立ち止まる。

霧崎 「せっかくだから、下らない所を彷徨ってる君にお手本を見せてあげるよ」

霧崎、楽しそうに笑い声を上げながら、全力疾走で退室。ドアは開いたまま。

春野 「え？」

激しい足音が続く。

複数人の悲鳴と激しい物音。

やがて静寂。

春野 「嘘だろ」

1. 霧崎家・二階・廊下(夕)

霧崎の私室から出てきた春野がゆっくりと進む。

2. 霧崎家・二階・祭の私室の前(夕)

ドアは開け放たれている。

霧崎祭(16)含めた少年たち数名の滅多刺しにされた死体が血塗れで倒れている。

春野、しばらく茫然と惨状を見つめる。

春野、やがてゆっくりと歩き出す。

3. 霧崎家・階段(夕)

滅多刺しにされた少年たち数人が倒れている。辺りは血塗れ。

春野が一番上の段の際で立ち止まる。

霧崎の声「どう？ 今この家で正しいのは、息吸って吐いて心臓

バクバクさせてるわたしたち二人だけだよ。相対的じゃなく絶対的にね。死人に口なしなんだから」

4. 霧崎家・玄関(夕)

高城充(45)、滅多刺しにされて血塗れで倒れている。

霧崎がリビングから出てくる。全身に返り血を浴びて清々しそうに微笑んでいる。

霧崎 「君の言う『正しさ』なんてさ、所詮は無理やり奪い取る程度のものなんだよ」

5. 霧崎家・リビング(夕)

霧崎詩(40)、御神体に向けて土下座したまま、首から血を流して死んでいる。唯一滅多刺しにされていない死体。

6. 霧崎家・階段(夕)

春野、羨望と陶醉の眼差しで霧崎のいる玄関の方を見ている。

春野 「凄い……きつと殺せるよ……君となら、世界中の人間を……！」

春野、死体と血溜まりを避けながら階段を降りていく。

7. 霧崎家・玄関(夕)

春野が階段を降りきる。

霧崎がナイフを仕舞い、春野に血塗れの手を差し出す。

春野が数歩の距離を歩く。

春野が霧崎の手を取る。

霧崎、逆の手で春野の腹に触れる。目を閉じて、感じ入るように、

霧崎 「やっぱり、わたしと同じじゃん」

霧崎、ポケットから包丁を取り出すと、春野に渡す。

霧崎 「はいこれ、君の。台所にあったやつだけど」

春野、興奮しきって目の焦点が定まらなくなった危
うい笑顔で受け取る。

春野 「ありがとう」

二人、手を繋いだまま歩き出す。

霧崎 「もう貧乏くさいやりにくくなってなくて良いよ。これか
らは憎悪の貴族よろしく、パーツと散財しまくりまし
う」

春野、危うい笑顔のまま、力強く頷く。

霧崎、再びナイフを取り出すと、前方に掲げて、

霧崎 「じゃあ改めて始めよう。全人類皆殺し大作戦を」

8. 住宅街・外観（夜）

地方都市の平凡な住宅街の一角。

パトカーと救急車のサイレンが鳴っている。

止む。

銃声が数発。

春野の悲痛な叫びが長い間響き渡る。

終